

日本新舞踊とアレクサンドル・サハロフ  
佐藤真知子（お茶の水女子大学）

本発表では、二〇世紀初頭にドイツを中心に活躍した舞踊家アレクサンドル・サハロフ（Alexandre Sakharoff 1886-1963）と日本新舞踊への影響関係を検討することで、この時期の日本でまなざされたサハロフの重要性について考えたい。

サハロフは、イサドラ・ダンカンやエミール・ジャック＝ダルクローズからやや遅れて活動を開始した、いわばヨーロッパにおける「新舞踊」の第二世代ともいえる舞踊家である。彼の舞踊活動は世界各国にわたり、一九三〇年代には日本にて二度の来日公演を果たしている。サハロフはもともと画家であり、一九〇〇年代にはカンディンスキイらと舞台創作を手掛けたことなどから、美術が舞踊に導入された例としてとらえる先行研究が存在する。しかし当時の論評をながめると、彼の舞踊は彫塑的であると同時に、音楽的で、詩的であるとされている。また欧州留学を経てサハロフを日本に紹介した山田耕筰らは、対象の模倣や文学から脱却した「舞踊詩」運動を進め、石井漠らとともに日本の新舞踊を推進した。これらを考慮すると、サハロフとは単に、美術が舞踊に導入された例として捉えるのみでは説明がつけられない。

本発表では、大正から昭和にかけて数多く発表されたサハロフ評に焦点をあて、日本から見たサハロフ像に迫る。と同時に、これに対して日本の舞踊家らが自身の求める舞踊の方向性をどのようにとったかを、彼について多くの記述を残した石井漠に焦点をあてて検討する。

サハロフと石井は、ともに無音楽舞踊を標榜した点で共通の方向性をもつ。石井は身体の動きのみで自律する純舞踊を、サハロフは沈黙の中に動きのメロディーを立ち表すことを究極の目標としている。サハロフの舞踊作品は時事的で社会的な事柄からは完全に距離をおき、「音楽的彫塑」という言葉で表される美的形式を追求する姿勢を明らかに示している。これについて石井は、混沌たる近代舞踊の揺籃期に新たな形式の渴望に応え、独自で完成された作品を生み出した点にその特異性を認めている。しかしその舞踊は、筋肉の興奮や肉体の自由な飛翔といった運動的質が十分でない印象を与え、今日的というよりもむしろ記念碑的であるとする。この時期の日本でサハロフは、舞踊が純粹な運動の言葉をもち独立性を獲得していくためのひとつの参照点となりつつも、身体という素材そのものがもつ情感や迫力、ひいては日本独自の肉体的特性に目を向けるきっかけとして働いた可能性がある。